

Title	資本主義的経済組織の本質と作用：ペルンシュタインの所論
Sub Title	
Author	金原, 賢之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.9 (1923. 11) ,p.1546(72)- 1569(95)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19231113-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

より大なる人類の社會の爲めに犠牲に供するを辭せぬであらう。

スミスは正義にして毀たるれば社會全體は一日も立つ可からずとなしたのである。曰く「正義は全殿堂の立つ基石である。若し此基石にして除かるゝことあらんか、然らば人類社會なる巨大なる全建設物は、然り此世に於て之を保ち之を支持することが謂はゞ自然の特別な任務たる彼の建設物は瞬時にして必ず土崩瓦解し去るであらう」。しかも正義を毀損する徒輩は何の世にも存在するが故に、斯の如きを罰して正義の勝利に導くこそ即ち法律秩序の任務とするところなれど——而してスミスは之と共に其自然法的見地に立ち戻るのである。曰く「正義の法律にして保持せられずとせば社會は一日も立つ可からずして、而して相互に不當を加ふるを看過せざる人間の社會的關係は不可能たるが故に、

此必要に迫られて吾々は之を毀損する人を罰して正義の法律の貫徹せられんことを圖るのである……社會が此目的の爲めに設定する規則は各國若くは各國家の民法刑法を示すものたるのである、而して是等規則の頼つて立つ若くは頼つて立つ可き原則こそは恐くは總ての科學中にて最も重要な特殊科學、しかも今日に至るまで研究せらるゝこと最も少かりしもの、即ち自然法の對象たるのである」。

資本主義的經濟組織の本質と作用

——ペルンシュタインの所論——

金原賢之助

現代の文明諸國に於ける財産及權利の分配状態

態は資本主義的社會組織と稱せられる。而して此組織も亦、他の社會組織と同じく、それに相應せる經濟形態を其基礎となしてゐる。即其基礎とは、全く一定せる、財の生産及流通の方法である。世人は、此一定せる方法を、資本主義的經濟方法、或は簡單に、資本主義と名付けてゐる。

然らば此資本主義的經濟なるものは、如何にして發生せしものであるか、又如何なる意義を有するかに關して、茲にペルンシュタインの所説の概要を窺つてみたいと思ふ。

一 資本の意義

先づ、資本とは何ぞやの問題に入る。之に對するペルンシュタインの答は必ずしも明確ではないやうである。彼は、資本の本質を明確ならしめんが爲には、資本なる言葉は如何にして發生したか、如何にして其は概念となつたか、又

此概念は本來何を意味してゐたか、の研究に入るを以て最良の方法と考へてゐる。何となれば、資本なる言葉は、今日、極めて種々なる意義に用ひられてゐるからして、之等の用法から或る共通の概念を直ちに歸納するは、可なり困難な問題であるからである。

姑く彼に従へば、此語は中世に發したものであり、ラテン語の *caput* (頭) から派生したものである。而して世人は、債務に對して支拂はれる利子と區別せられた貸附元金額と解してゐたが、其債務は使用財から成るゝ貨幣から成るとを問はなかつた。後に至つて、利益を獲んが爲に用ひらるゝ一層大なる貨幣額が資本と稱せられた。若し之が利子を取つて貸出されたのであるならば、貸付又は利附資本 (*Leih-oder Wucherkapital*) であり、商業に投資されたのであるならば、商業資本 (*Handelskapital*) であつ

た。更に、小なる手工業的生産の外に、多額の費用を要する生産の營まるゝに至るや、生産されし財貨にして將來の生産に適し之に用ふるものと定められたるものを資本と認むるに至つた。之は生産資本(Produktionskapital)である。

斯様な種々な用法の間にも一の共通なるものがあつた。即資本と稱せらるゝ財貨は可動的でなければならぬ、換言すれば人の欲する位置に置かれ得るものでなければならぬと云ふことであつた。此故に、土地は資本概念中に加へられなかつた、云ふまでもなく土地は可動的でないからである。之に反して工場の建物は勿論可動的ではないけれども、人の意思によつて其現に存在する場所に建設されたものであるからして實際に眞の意味に於ける資本と云ふことが出来る。

往時に於ける資本概念の用法には、斯くの如

するものは、社會主義者其人であることは勿論である。ペルンシュタインは、資本の生産力 換言すれば自然的資本觀を、全然無視して了ふが如き章句を、特に設けてはゐないやうであるが、併し上記の所言によるも、次に述ぶる所説によるも、彼も亦其收利力に重きを置くことは明かである、と同時に當然である。

茲に於いて彼は、個々の場合に就いて法律的資本觀を述べる。即例へば、家屋は本來生産の手段ではないが、一家屋から繼續して利得が獲らるゝ場合には、其家屋は今日資本——特種なものではあるが——である。同様に、商業に於ける經營設備、ストック、其他の經營手段、並に銀行業及金融業の設備と經營手段、或は財産、依食家の有する利子を生ずる財産は皆資本である。之に反して生産手段は總て直ちに資本など云ふ譯ではない。貧乏な勞働者が耕作に際して

く種々なるものがあることを述べたる彼は、次に資本に許容されたる二個の全く相異なる意義即自然的資本觀に於ける資本と法律的資本觀に於けるそれとを明かならしめんとする。今日に於いては一般に、工場建設物、機械、原料品、助成品、及經營維持の爲に必要な手許資金は、共に生産的企業の資本を形成する要素である。乍併今日、斯る企業に投入せられたる資本の職能は、單に生産それのみではない。其本分は主として、その所有者を富裕ならしむる所の不斷の源泉たることに、存するのである。即前者の職能は、第一の資本觀に於ける資本の特徵たる生産力であり、後者は、第二の資本觀に於けるそれの特徵たる收利力である。此兩種概念の區別は、經濟上に於ける資本に關する諸問題を考察するに當つて、極めて緊要なることである。而して其後者即法律的資本觀を最も強調

用ふる鋤が、彼自身のものである場合には、此鋤は彼にとつて、道具ではあるが、併しそれ以上のものではない。然るに其鋤が、賃銀を得る爲に此鋤を以て勞働する勞働者の親方とか企業家とかの所有に屬するならば、それは此親方の經營資本の一部分である。親方は勞働者を、其勞働から利潤を得んが爲に使役し、勞働者は親方に、マルクス其他の社會主義者が述べてゐるやうに、餘剩價值を齎らすのである。此見地から觀れば、又既に早くより、貸出されたる資本に利子が支拂はれなければならなかつたからして、資本概念は、一般に、餘剩價值の獲得を意味してゐる。而して既に指摘せしが如く、彼が最も強調する點は實に茲に存するが如くである。

資本は、之を利用することによりて、其際費されし勞働が一般勞働市場に於いて償する所の

又は價するであらう所の賃銀より、以上の収益を獲るものであるが、通常非常に多額の生産手段から成り立つてゐる。而してその中には、何時にても生産手段に變へ得らるゝ價值ある財即貨幣も含まれてゐる。貨幣は一般に交換さるゝ貨物で、何人も之を受納し、何物とも交換され得るものであるからして、常に生産資本、商業資本或は貸付資本として利用され得るものである。其處で、吾人が資本家と呼ぶ場合には、少額の貨幣を所有する者ではなく、寧ろ、被傭者の賃銀俸給より多額の餘剰を收めんが爲に生産、商業、金融事業に使用されてゐる所の又は使用され得る所の經濟手段を、大量に所有せる者を指すのである。彼が斯る餘剰を獲得し得るのは、企業より得らるべき總收入より少額を成せる賃銀俸給を以て、勞働に服せんとしてゐる人々を見出す場合に於いてのみである。他の言

々によりて營まるれば營まるゝ程、資本なる概念は賃銀勞働なる概念と益々密接なる關係を結ぶに至る。而して賃銀勞働は、獨立企業家たり得る手段に乏しき勞働者の形體に於いて、資本家に對立することゝなる。資本と賃銀勞働との間の此關係が一般に行き渡つてゐる場合に、吾人は之を資本主義と云ふ。故に資本主義は、人々が次の諸階級に分たれることを前提とする。——其一つは、大量の生産手段を支配する所の人々から成立する。他の一つは、其勞働力以外には提供すべき何物をも有せず、其生命維持の爲には之を賣却せざる可らざる者、若しくは一番良いとしても、生産手段は所有してゐるが、盛なる企業を營むには十分ならざる者から成立する。

其處で若し吾人が、資本主義の本質を究めんとするならば、その根源は、資本を餘剰價值

を與へてすれば、其勞働の報酬が資本家に餘剰から出た餘剰とは云はない、投入された資本に關する利潤であると世人は云ふ。同時に協力して之を造り出した勞働者及被傭者も考慮に入れば、マルクス説の如くに餘剰價值と稱せられる、即之等の勞働者及被傭者が彼等の報酬以上に生産した價值の餘剰額である。(Bernstein, *Wirtschaftswesen und Wirtschaftswerden*, S. 73-76)

二 資本主義の本質と前提

ペルンシュタインの所説に従へば、資本主義の存立の爲には二個の前提が必ず存在するものである。一は資本家と勞働者との階級分立であり、

二は流通經濟の或程度以上の發達である。

先づ其第一より觀察せんに、産業が、以上に述べしが如き方法に於いて、資本を所有せる人

即利潤獲得の爲に利用することに、存するを知る。實に利潤なる概念は資本主義に離る可らざるものである。姑く考慮を既往に遡らしめ、資本を以て營まるゝ生産の始りし時代に想到すれば、斯る生産は、嚴格なるギルドの規定が自由競争に路を譲つたのと、時代を同じうすることを知る。又生産物の市場を益々擴大するが如き産業經營法を認むる法律規定の、一般に普及せる經濟組織を基礎となした場合にのみ、資本主義的生産は一般に行はるゝを得たのである。茲に於いて資本主義は、階級分立の外に、もう一つの前提を有することゝなる。即資本主義は、古代に於けるが如く、封鎖的經濟内に於いてそれに屬する人々の總ての需要品が、最早生産されない場合にのみ存在し得る、と云ふことである。資本主義は、勿論、自給自足の大家族の時代には不可能のことであつたし、又都市が、其

規則を以て、侵入者に對して其地方の産業を保護すると同時に、其産業の經營を制限する場所に於いては、隆盛に赴くことが出来なかつたのである。故に第二の前提は次の如く言ひ換へることが出来る、——今日吾人が學問上流通經濟と稱する所の經濟的生活狀態が、既に或程度まで實現されてゐること、詳言すれば、家から家へ、家族から家族へ、都市から都市へ、州から州へと、既に非常に多量な財貨交換が行はれ、従つて不斷の交易は家、莊園、村落及都市を越へて發展してゐる所の、經濟狀態が或程度まで實現してゐることである。(a. a. O. S. 76-7)

三 資本主義が生産方法に及ぼす影響之を分ちて三節とする。Aは勞働の分化と専門化であり、Bは勞働の集合と經營の集中であり、Cは自然力の征服と機械と題する。

(A) 以上に説きし範圍に於いては、資本は、

る。此方法によつてこそ、同時に大量な生産が行はれるのであつて、實に此分勞は隆盛に赴きつゝある資本主義的生産の一大特徴である。

併し、右の如き生産分割は産業の歴史上最初に現はれたる分勞ではない。既に賦役農場に於いても、更に一部分はかの家族共產團體に於いてすらも、職業による分勞が行はれて居つた。而して生産の増加に従つて社會の富も亦増加したからして、同時に職業の數も増加し、又生産を更に専門化する目的を以て、新職業の形成が増加するに至つたのである。

乍併、職業の分化及勞働の分化は唯勞働進化の一面に過ぎない。それと相併んで道具の改良と専門化とが進んでゐる。言はゞ道具も亦分化してゐるのである。唯にそれのみには止まらない。分勞は最初から勞働の結合をも意味してゐる。分勞と相併んで、經營上には勞働の新しい

先づ貸付資本及商業資本として表はれてゐる丈で、最初の資本家は、金貸業者殊に銀行業者及商人であつた。其處で、資本は如何にして生産を占領したか、又如何にして工業資本となり得たか、の問題が起る。經驗が吾人に教ふる所に依れば、自由競争が支配する場合には、同等の商品であつても、廉價なるものが勝利を得て、市場を獨占する。更に、此生産上の廉價は、之が賃銀の低減によつて達せらるゝを得ざる場合とか、一定の事情が賃銀の低下を妨ぐる場合とかには、勞働其ものの、能率を擧げることによつてのみ、達し得らるゝことを吾人は知る。而して能率の増進は、二種の方法によつて達せらるゝ。第一には、財貨の生産が各個の部分勞働に分たれ、勞働は又、總ての勞働者が常に同一の單純なる部分を作らなければならぬ程に、細分される、同時に他の勞働者が部分的仕事を結合す

集合が行はれる。或専門化された數多の道具が個々別々に其役目を果す代りに、今後は同時に又一つの動力に運轉されて其勞働を遂行せんが爲に、集合せしめられる。即勞働の機械が生ずるのである。其處で、道具の動力たりし人間の手の代りに、他の動力が用ひられる。他の動力とは自然力であるが、人間によつて、最初に動力として用ひられた自然力は、一般に水及風であつた。十八世紀の末葉に至つて、之等に蒸氣力が加へられ、更に百年後に瓦斯並に電氣が生産の動力として應用さるゝに至つた。

斯くの如き不斷に行はるゝ生産の専門化が如何なる狀態に在るか、今日職業統計が吾人に教へる。人の知れるが如く、獨乙其他の諸國に於いては、時々職業調査が行はれ、人民を其職業に従つて計算し、其數によつて幾何の職業が新しく發生したか如何なる變化を蒙つたか、知

も得らるゝ。試みに獨乙の統計を觀れば驚く可き事實が見出さる。化學工業は一八八二年に一八二、一八九五年に三三二、一九〇七年に四〇六と計算され、金屬加工工業は同期間に三〇〇・七〇八——一〇〇に上り、同工業のみに於いても八〇〇の新職業が発生した。機械工業に於いては同二十五五年間に三三五——一二五〇に、即九〇〇以上の増加を示し、又工業全體として觀ると、二六六一——九〇〇〇に、即獨乙の工業は二十五年に三倍となつた。

近代の資本主義的生産方法の示した、以上の如き益々旺盛になり行く、勞働の分化、及新勞働の發達は、過去の如何なる時代に於いても、——之に近い程度に於いてすらも、——存在したことはなかつた。之は實に、近代の資本主義的經濟の特殊なる現象である。而して此經濟に於いては、斷えざる競争の壓迫が、常に、勞働

の新しい分化と集合とを、それと同時に職業の間斷なき増加と變化とを、生産の法則となしてゐるのである。(a. a. O. S. 77-82)

(B)以上の職業統計に於いては、近代社會に於ける勞働専門化の經過が明かに示されて居るが、同時に吾人は他の現象即勞働集合の狀態をも觀るのである。獨乙に於いて一八八二年に、小經營従業者の數は四、三二五、八二二人、一九〇七年には五、三八三、二三五五人であつた。即概算二四・一六パーセントの増加を示したが、併し總人口の増加に比すれば、小經營は其人數に於いて遅れてゐる、と云ふのは獨乙人口は二十五年間に三六・五パーセントの増加を爲したからである。之に反して中經營に計へられた、六——一〇人を有する經營は、大約五〇〇、〇九七から一、一〇四、五七九人に、即一二〇・九パーセントの増加を爲した。一一——五〇人の經營は、

八九一、六二三から二、五八四、五七五人に、即一八九・九パーセント増加した。經營が大となればなる程、當該部類に屬する従業者數の増加は益々大なるを見る。更に大なるものを觀るも、五一——二〇〇人を有する經營は、七四二、六八八から二、四一八、一五〇人に(二二五・六パーセント)二〇一——一〇〇〇人を有する經營は、六五七、三九九から一、九九一、〇五六人に(二〇二・九パーセント)一〇〇〇人以上を有するものは二二三、二六〇から九五四、六四五人に(三四七・八パーセント)増加した。

以上の如くに、小經營が、其人數に於いて、人口増加と同一の割合を以て増加し得ざりしことあると同時に、吾人は又遙かに大なる程度の増加を見ることもある。二〇〇人を有する企業が極めて重要なものと考へられ、一〇〇〇人の使用人を有する企業(工場等)は多少稀有な現

象と未だ觀られてゐた時代があつたと同時に、今日に於いては、吾人は三萬人以上を有する企業を有するのである。又吾人は、多數の經營を包有する所の、各種の大企業を有してゐる。之等の多數の經營は嘗ては其事業に従つて別たれてゐたものであるが、漸次一企業に吸収されたのである。其處で企業の数、經營の數より少數であることは明かである。例へば、或企業には、石炭採掘に製鐵業を兼ね、其製鐵業も單に鋼鐵を製する丈でなく板金も作り、諸種の貴金屬の加工までも行ひ、更に運送すらも自ら營むものがある。之等各種の部門は從來全然獨立して營まれて居つたものであり、又其分立してゐた事が、分勞の殆んど發達せざりし古き時代の生産方法に比して一大進歩であると考えられてゐるのであるが、今や更に巨大なる企業の下に包括せらるゝに至つたのである。世界に有名な

るクルップの企業の如き既に例外的現象ではないのである。

斯の如くに、資本主義的進化は經濟生活の所有する方面に起つてゐる。唯に巨大なる企業に止まらず、主として手を用ふるが如き事業に於いても、程度は低いとは云へ、尙ほ斯う云ふ傾向を認むることが出来る。建築業に於いても、建築に關する各種の部門と裝飾業等を包括するが常であるが、斯ることは三、四十年前の建築師の豫想しなかつた所である。勞働集合の經過を明瞭ならしむる企業の適例として他に新聞事業がある。之等の資本主義的企業に活動せる數百人の各種従業者は、全く違つた職業及職業階級に屬し、全く異つた部分の勞働に服し、相互に關知する所なく、大なる一生産組織に從屬してゐる。實に此總括的組織は一生産物に對する生産費を最も低廉ならしめ、商品を可及的廉價に

市場に供給し、以て競争を杜絶し得るものである。(a. a. O. S. 82.4)

(C) 資本主義に育まれた近代的发展の實例をもう少し擧げてみよう。今日より七十年前の一八五〇年は蒸汽機關が工業に用ひられてより既に約八十年に垂んとせるが、之が工業に應用せらるゝもの最高三十馬力を殆んど出でゝゐなかつた。然るに今日に於いては一五、〇〇〇馬力或はそれ以上の蒸汽機關を用ふ。其發展は實に驚くべきものがある。普魯西のみに於いても、蒸汽機關の馬力數は、一八五一年と一九〇一年との間に、約九萬から四百五十萬以上に上つた、而して文明諸國の馬力數は一九〇二年に七千萬乃至八千萬と註せられた。

斯の如く、自然を人間の用に役立たしむるの甚だ盛なるは、資本主義的發展の結果であると云はなければならぬ。即蒸汽力を斯く廣き範

圍に亘つて利用し得んが爲には、一の前提があつたからである、——新種類の機械が常に用ひられしこと、換言すれば益々多くの資本が機械の爲に投資さるゝを得たと云ふことである。又之等の機械を設備したり使用したりするには、企業慾が必要であり、之等を目的に適應するやうに利用するには、事業的觀察力が必要であつた。更に注意すべき事實は、機械が益々其生産力を増すと同時に、其一馬力に要する石炭消費量が技術の進歩の爲に益々減少すると云ふことである。具體的に云へば、以前に三十噸の石炭を要したると同一の力を得る爲に今日は只一噸を以て足ると云ふことである。即資本主義的經濟の下に於ける技術は斯くの如くに蒸汽力の費用を低廉ならしめたのである。併し技術の進歩は一馬力當り石炭消費量を節減したけれども、石炭消費量そのものは益々増加を爲してゐる。一

例を撰べば、近代的資本主義的生產の搖籃地たる大ブリテンは一八五〇年には四千六百萬噸の石炭を消費したが、一九〇〇年には、一方に節減されしにも拘らず、一億六千六百萬噸に上つた。之にも優るものは獨乙にして一八五〇——一九一二年間に六——一四五百萬噸に上つた。合衆國亦此例に洩れず、實に鐵と石炭の消費量は其國の經濟的發展の程度を卜するの標準たるものである。

斯る間に人間は他の自然力をも利用することを知つた。電氣及之が應用になれる電氣化學であること勿論である。電氣及電氣化學の助力によつて新しき材料が生産され或は工業の爲に役立つものとなされるのは、近代的发展の特徴を表はしてゐる。

斯くして、近代的技術は、生産費の低減を圖らんが爲に、分勞等によつて生産高の増加をな

さんとすると同時に、同じ目的を達せんが爲に、生産の経過を迅速ならしむることによつて經營資本の回轉の頻繁を即資本と利子の節約を齎らさんとしてゐる。(a. a. O. S. 846)

四 資本主義と生産の増加、交通の發達並に都市の發達

(A) 吾人は前節に於いて、鐵の消費量は其國の資本主義的生產發達の程度を卜するの標準となる旨を述べたが、此見地より獨逸の發達を觀察してみよう。一八五〇年の銑鐵產出量は漸く二〇八百萬瓩であつたが、一八九六年には六三七三百萬瓩、十六年後の一九一二年には一七、六一七百萬瓩に達した。同期間に於ける人口の増加が四倍なりしに比して驚く可き増加である。人口一人當り銑鐵消費量は、一八七六——一八八〇年の五年間は一年五一・四瓩、一八九六——一九〇〇年は、一年一四二・六瓩、一九一二年は

二五二・七瓩である。

他の一標準としては棉花がある。獨乙は一八四三——一八五〇年間平均一五、七八二噸の原棉に加工した。之に反して一九一二年には五〇一、六六〇噸であつた。之と同様の生産の増加を、吾人は工業の殆んど所有する方面に於いて求むることが出来る。併し斯の如き驚異す可き生産の増加も、地方間、國際間、大陸間に於ける人間の交通が、同一期間に同様に重要な地位を占めなかつたならば、絶對的に可能ではなかつたであらう。(a. a. O. S. 867)

(B) 實に交通の發達は、近代の資本主義的經濟組織の特徴を表はすものである。二三の統計は直ちに之を明かならしむるであらう。近代の主要交通機關たる鐵道に就いてみるに、大ブリテンは一八五〇——一九〇五年間に一〇、六六〇——三六、四四七千に、獨乙は一八五〇——一

九一二年間に五、八五六——六二、七三四千に、米國は同期間に一三、八六八——四〇二、八八七千に延長した。之等の延長は、主としてそれらの諸國の内地に於ける交通の異常なる發展を示してゐる。併し鐵道網の擴大が直ちに貨物運搬の増加と人間交通の頻繁とを示すものでないことは、勿論であるが、實際の統計に照して觀れば、之又異常の増加を爲せること明かである。鐵道と相併んで重要な世界の商船を採つてみるも同様である。一八九一年には登録噸數百噸以上のもの一一、七〇五を數へ其總噸數は一二、八百萬噸であつたが、一九〇二年には其數一二、一〇〇其噸數二四・九七百萬噸に達した。斯る發達は、人間交通と貨物運搬がそれと歩調を揃へて激増しなかつたならば、起らなかつた事であらう。

今日——それは資本主義的發展の特徴である

が——或る生産部門の地方的集中が行はれる。原料品半製品が容易に得らるゝとか、自然力を低廉に利用し得るとか、適當な勞働を得るに容易なるとか、市場に接近せるとか、其他種々の事情によつて、工業的中心地方が形成される。之等の中心地方に於いて生産されるものは、單に其地方の市場をのみ目的とせず、又其國の國內市場を以て満足せず、實に世界市場を目的となしてゐる。世界市場を目的となし得るのも、交通機關發達の結果と云はなければならぬ。嘗て Ferdinand Lassalle が其 "Bastiat-Schulze" に於いて述べた言葉は今や完全に實現されてゐる、即何人も自ら使用せざるものを生産し、自ら使用するものを生産せざるを以て近世經濟の特色とする。唯多少之が例外を爲すものは農業であるが、工業に於いては何人も自ら消費するものを生産せざるを以て、一般の通則となして

ある。之は寔に近代的資本主義的經濟の特徴であり、吾人が完全なる交通經濟に到達して以來、漸く一般的となつた事實である。(a. d. O. S. 87-91)

(C)資本主義的經濟發展のもう一つの影響は、大都市及工業中心地への人口の集中である。都市が益々増大するのは、工業の要する人口は益々大なること、都市は廣大なる商業地なること都市生活は多大の誘惑を藏すること等の爲である。同時に此都市生活は益々當該國民全體の社會的生活の規準となつてゐる。英國に於いては、今日人口の六分ノ五は都市に住んでゐる。England 及 Wales 丈に於いて、一八九一年に、人口の六一・四パーセントが人口一萬以上の都會の住民であつた。獨乙に於いても、一八六七年には人口の三分ノ二が田舎及田舎の都會に住してゐたが、一九一〇年には五分の二となつた、

詳しく云ふと、村及田舎の都會の人口は二千六百三十萬から二千五百七十萬に減少したが、大中小の諸都市人口は千三百七十萬から三千九百萬に増加した。

地方人士は以前は自己の生活を自負してゐたが、今日は出來得る限り都市生活を享樂せんことを希つてゐる。現時の農業問題の大部分は實に茲に存するのである。又政治的生活にとつても都市及工業は益々重要な意義を有してゐる。獨乙に於いては、既に一八九五年に、當時は未だ農業人口が都市人口に優つてゐた時代であるにも拘らず、工業生産物の價格は農業生産物の價格を遙かに凌駕してゐた、而して此超過額は年一年と甚しくなつてゐる。實に工業は國民の富の決定的要素となり、農業的生産は工業的生産に比して益々僅少なる部分を占むるに過ぎない。今日、近世諸國民の富の最大部分は都

市及工業地方に於いて造られつゝありと云つても敢て過言ではない。(a. d. O. S. 90-100)

五 資本主義と流通資料の増加

交通の發達、生産手段の増加完成及企業の増加擴張は近代の資本主義的經濟の主たる特色であるが、之等は其結果として生産物の激增を生じた。商品たる生産物は貨幣を以て賣買される。従つて商品の交換が既往より一層廣き範圍に亘つて行はるゝに至るや、既往と同量の貨幣を以てしては足らず、之等の商品交換を容易ならしむる爲に貨幣其他の流通資料を増加しなければならなかつた。貴金屬貨幣の用ひらるゝや、先づ鐵、銅、次に銀が撰ばれたが、經濟階段の高まるに従つてより、高價なる金が撰ばれた。而して統計に徴するに各國の金の蓄積は年を逐ふて増加してゐる。けれども金の流通に關しては其蓄積高のみを以ては足らず、其回轉度數をも

参考しなければならぬ。加之硬貨は、所有る貨物交易を媒介するには最早十分でなくなつた。其處で貴金屬貨幣に代るべき何等かの代用物が必要とした。此の職能は一部分各種の證券たる紙幣を以て充されてゐる、即國家其他の證券、銀行紙幣、手形、小切手の類である。

之等の貨幣代用物の統計を觀れば、資本主義的經濟に於いて行はるゝ交易の範圍の如何に大なるかを圖ることが出来る。先づ其一たる銀行紙幣に就いて見るに、一九一三年現在高は、獨乙帝國銀行二五九三百萬マルク、佛蘭西銀行(マルクに換算して)四八二七百萬、英蘭銀行五九二百萬、奧太利匈牙利銀行二一二百萬、露西亞帝國銀行一六六八百萬留であつて、其數は年々増加してゐる。更に大なる商業の補助資料は手形である。交易の範圍を知るには、之が流通の統計を参照しなければならぬ。勿論所有る

手形が帝國銀行に集る譯ではないが、試みに帝國銀行の統計を観れば、一九〇三年には、九十六億萬マルク一九一三年には百二十六億餘萬マルクの手形流通高である。他の諸國に於いても、其數字は同様に極めて巨額に達してゐる。銀行紙幣、手形と相併んで特に英國に盛に流通するは小切手である。英國に於いては、數多の理由よりして小切手流通は硬貨流通より便宜であるからして、何人も小切手を以て支拂ひを爲すのであるが、一八九五年にロンドン諸銀行の收納せし資料は、小切手及手形九六・八%英國銀行紙幣二・一%地方銀行紙幣〇・四%の割合であつた。何となれば、英國銀行は、英國の富と商業に比して、大陸の諸銀行より遙かに少額の紙幣を流通に附してゐるに過ぎないからである。(a. O. S. 91-4)

六 資本主義と資本の可動性

商品、機械、其他建築物、土地工事、運河等の如き設備より成れる資本は、其儘で之を分割移轉せしむることは出来ない、株式の手段を用ひることによつて、之を可動的ならしめ又分割するを得るに至ることは云ふまでもないことである。株式は企業資本の價値の分前であり、今日大部分の企業は株式會社として設立せられる。其處で例へば株式組織の工場は、之を有する多數の人に屬して居る次第であるが、其多數の人々の一部分は常に變動する。茲に於いて工業資本も商品資本も著しく可動的性質を附與せらるゝのである。Juraschek 教授の計算に依れば、一八九一年獨乙現在の株式會社數は三七一二であつて、其株式資本額は六十八億四千五百萬マルク、社債資本額は六十三億八千七百萬マルク、合計百三十二億マルク以上の資本價値であつた。英國に於いては其數更に大にして、

a. O. S. 94-5)

七 資本主義と資本家の増加

八八六年には其數九四七一、其資本金百五億八千萬マルクであつたが、十年後には數は二一、二二三に、資本金は二百二十九億八百萬マルクに増加した。一九〇六年獨乙の株式會社の資本及社債の總額は百四十億マルクに達し、間もなく二百億を突破した。英國其他の諸國に於ても事情は正に同一である。株式會社の外にも種々の結社企業があるが、之等の大部分のもの、持分も亦容易に移轉される。故に工場其他の企業財産は可動的となり、資本其ものも流通資料となる。併し之のみには止まらない。即斯くして資本は非個人的性質を帯びる。昔は仕事場は其所有主と個人的に關係してゐたが、今日の株式會社たる企業は、多く、事業を意味するけれども、個人を意味することはない。其株式は轉々移動し、何人が之を有するか、所有者は何處に住するか、は世人の關知しない所である。(p.)

株式企業と云ふ形態は他の一結果を齎した。非生産者數の増加即是である。何等の協力をもなさに社會的餘剩生産物の分配に與る人の數は益々大となる。然らば株式とは何であるか。勞働者其他の從業者の報酬以上に出づる所の、當該事業の餘剩收益に對する權利の表徴である。昔株式會社の存せざる時代に、斯る餘剩收益を獲得せんと欲する人は、先づ自ら企業を設立しなければならなかつたが、今日は何人でも金さへ有すれば之を爲すを要しない、他人が彼の爲に之を爲す。同時に今日は、大企業の爲にも、それ相應した大資本金を無制限に必要としない。株式を所有する多數の中小資本家が其役目を務める。此事から更に或一の社會的結果が生ずるのである。

嘗ては、企業が大となればなる程資本は益々集中せられて、資本家の數は益々減少すると、一般に認められて居つた。換言すれば資本家そのものは益々富裕となるが、其數は益々減少すると云ふのである。併し之は的を逸してゐる。事實に於いては、企業の大集中と共に株式の形態に依て財産の分散が行はれ得るものである。勿論獨乙に於いては或理由の爲に之を確證することが困難であるが、株式に關する法律を異にせる英國に於いては、各種企業の持分が幾人の手に存するかを立證することが出来る。例へば、英國の最も有名なる大醸造所——最も盛に集中の行はるゝ事業の一は醸造業である——五ヶ所の資本は一六、六〇四人の株式所有者と約一萬人の社債所有者とに分有されてゐる。之等の大醸造所は恐らく二三百の小醸造所を廢業せしめたであらうが、併しそれが爲に資本家が減少し

て了ひはせぬとは何人も認め得る所であらう。五醸造所の資本が一萬六千六百餘人に分有せらるゝ程に資本は株式の形態に於ける財産として分散し得るのである。——茲にベルンシュタインの見解を端的に述べれば、大資本家が益々大となるに従つて小資本家は之に吸収せられて其影を没するものではない。大資本家と共に中小資本家は存立し得ると同時に、從來資本家ならざりし者も株券買入等の方法によりて資本家となり得るを以て、其數を増加するものであると主張する。然るに今日に於いては既にトラストなるもの出現して、大企業を更に集中し、集中されし資本を一層集中する傾向がある。故に小資本家は小資本家に益々壓倒せられて其數を減少するが如き觀あれども、彼は尙ほ確證を以て自説を固執する。例へば、英國には紡績業に有名なトラストがある。之には三十一の大工場を

併合したもので一億マルク以上の巨額の資本を擁する。けれども其株式は何人に屬するか。一八九八年に四七七四人より少からざる株主が此トラストの資本を分有せしことが確證された。實に株式は資本を多數者の手中に分有せしむる手段である。

併し、斯くして得られたる數字を採つて以て直ちに株券所有者の總數を示すものと云つてならぬことは勿論である。何となれば所有する可能なる會社の株券を所有して、何れの會社の株主名簿にも載つてゐるが如き過大資本家があるからである。けれども彼等と共に、大小所有者程度の多數の資本家も存在し、又増加してゐるのである。企業はより大となる、其れの集中は盛となる、と同時に資本家の數も増加する。而して資本家の増加に従つて、資本家の特殊の欲望の爲に働く者の數も増加する。資本家の從僕

の數も増加し、資本家の爲に贅澤品を生産する者の數も増加する。若し之が事實でないを假定するならば、社會は既に遙かの昔に勞働過多の爲に破産してゐたか、或は然らずんば勞働階級は現在あるとは全く相違した生活を爲してゐたに違ひない。今日經濟生活に於いて用ひらるゝ生産力は極めて大である。而して勞働者の生活狀態も多少改善された事は勿論である。併し長い間、生産増加の程度に比例してはゐなかつた。と云ふのは、吾人の生産の大部分が、働かない階級及之を護衛する者の爲に利用されてゐるからである。

茲に於いて吾人は近代の資本主義的經濟の結果として、生産的勞働と此勞働より生ずる餘剩收穫に對する法律上の權利とが益々離間することを認むることが出来る。株主は其所有する株券が時價幾何であるか、其企業の將來の見込

如何をのみ承知してゐて、如何にして生産さるか何人が生産するかは何等關知しない。株式會社は其總會を開くが、其際眞の株主程馬鹿らしき役割を勤める者はない。偶々出席した若干の眞の株主は、多く、少數であるからして、監理者及之に依つて支配さるゝ株主が通過せしめんとする議案に服従しなければならぬ。株券所有者は、若干の金員を出資し、之に對して他人の勞働の結果より幾何かの配當に與る以上の何事もなさないのである。(a. a. O. S. 95. 96)

八 資本主義と勞働階級並に使用人の増加

資本家階級と共に、之に對立する一階級が大膨脹を來たした。それは云ふまでもなく近世工業上に於ける勞働階級である。此勞働階級に就いて述べなければならぬ最初の事は、資本主義經濟が生産並に交通方面に於ける變革の結果

のとして獨立營業者ではないけれども、斯るものとして家庭の父となり、公民として獨立者となる。而して昔の手工業者が消費者として國民經濟上に占めし地位は、今日の丁稚以上には出でなかつたに反して、今日勞働者は、消費者として經濟生活上極めて重大なる意義を有してゐる。

一九一二年の調査に依れば、獨乙工業の賃銀勞働者數は八百六十萬と算せられた。此中には運輸業及商業上の勞働者並に名義上は獨立なれども實質上は勞働者以上には出でざる多數の小所得者を含んでゐないのである。今總て之等及其家族を總計するならば、二千五百萬の人口に達する。彼等が幾何消費するか、彼等が如何にして其欲望を高め得るか、と云ふことの、商業及工業に對して有する意義の至大なることは、敢て言を俟たざる所である。而して技術上及商

として、賃銀勞働階級の社會的性質をして昔の狀態より全然一變せしめたと云ふことである。昔と雖勞働者は、賃銀勞働者である限り、社會的に獨立してはゐなかつた、又一般に親方の家に寄寓してゐたからして、自ら親方となるまでは公民たる資格はなかつたが、併し獨立者となり得る見込は十分あつた。而して自ら仕事を始めるに至つて結婚した。此獨立の見込は尙ほ勞働者の多數をして、大それた目的や階級的努力から遠去からしめてゐたのである。であるから、公の問題などは勞働者にとつて直接利害の關する所ではなかつた。然るに今日の事情は正に一變した。勞働者と雖公の問題に注意を拂はなければならぬ、何となれば彼等及彼等の家族の幸福は國家の政策如何によつて直接の影響を蒙るからである。勞働者は賃銀勞働者として婚姻し、賃銀の爲に生涯勞働に服する。故に斯るも

業上の使用人の増加も亦、近世國民經濟上重大なる意義を有する。之は經營及商品交易の範圍の益々擴大せること、並に其基礎となる生産及交通に使用せらるゝ機械の擴大増加との結果である。獨乙の統計に徴するに工業及鑛業に従事せる斯る使用人は、一八八二—一九〇七年の間に九九、〇七六—六八六、〇〇七人に、即五九二・四%或は七倍の増加を示した工業、商業、交通業及農業の全經濟に於いては、三〇七、二六八—一、二九〇、七二八人に、即三三二〇・一%或は四倍の増加を示してゐる。勿論此階級の中にも少數の者は、既に有産階級に屬してゐるか、或は之に算へらるべきものであるが、多數は其本質が勞働階級に相類似して居り、社會的には之に算入せらるべきものである。(a. a. O. S. 100. 102)

九 資本主義の禍害と征服

都市の發展、交通の發達に連れて、國家社會に對しては新しき要求、新しき職分が發生し、嘗て豫想だにせざりし諸問題が惹起した。今日諸都市に於ける地價及家賃の騰貴は實に甚しい状態に在る。吾人は百年以前に於けるよりも遙かに豊富なる住宅衛生の知識を有してゐる。けれども労働者、下級官吏等の大多數の住宅は、多くの點に於いて當時より劣つてゐる、自然とは益々隔離される。加ふるに、労働者の報酬が増加すると、同時に都市に於ける大衆の増加の爲に家賃が騰貴し、結局労働者が奮闘して獲得したる所の大部分は家賃騰貴の形に於いて再び取り去られて了ふ。之は都市に於ける地代問題の一部分であるが、併し労働に依つて生活する一般民衆の爲に解決しなければならぬ大問題である。然るに資本の利害は斯る解決に反抗する、土地及資本の所有者の利害關係は之と衝突す

て又確保されてゐる限り、總ての文化的職分は等閑に附せられる。斯る支配に對抗するものは、國民の多數階級の利益の爲にする Demokratie の運動である。言ふまでもなく之は人民自らが支配する所の状態を齎らんとするものであるが、併し決して前途の見込なき努力ではない。何となれば、封建的特權が存続し得ざりしが如くに、資本主義的財産が、公共の機關によつては十分によく實行され得ざることを社會的に實行すれば兎も角、之が實行を止むるに至れば至る程、又其が利子及配當金の單なる源泉となればなる程、それを基礎とせる、政治上及經濟上の權利は、國民の多數階級の向上を益々妨ぐるを得ざるに至るからである。

之等の事情によつて今日明かにさるゝものは、労働者の諸團體が、經濟の方面に於いては企業家に對する労働者の賃銀運動として、政治

る。而して今日此利害關係の方が遙かに優勢であるのは、一部分は、資本家階級が減少せず寧ろ増大してゐるからである、資本主義が全土に擴大して其勢力を確保してゐるからである。

Plutus — 羅馬の富の神の名——と云ふ羅句語の原綴は、Kratein — 支配する——と云ふ希臘語とからして、富豪が支配せる状態を示す所の Plutokratie と云ふ語が造られたが、金力政治は、歴史上種々なる時代に、各種の文化の下に、存在してゐる。ブルトクラシーは時には或る文化を促進するが如き結果を生じたこともあるが、併し弊害ある反面を缺いてはゐなかつた。富裕階級は直接の支配手段と強大なる勢力とによつて、種々なる見地の下に社會的進歩に反抗してゐる。彼等は特權階級として滅亡する所か、永久に存続しようとしてゐる。彼等の支配が特別の法律によつて確保されてゐるからし

の方面に於いてはデモクラシー——ブルトクラシーに對する労働者デモクラシー——の闘争として、行ふ所の闘争である。之は進歩せる資本主義經濟の時代たる現代の特徴となる所の大なる政治的闘争である。而して此闘争の爲に團體を組織するのが、實に労働階級の任務である (cf. a. O. S. 102-104) 云々と。彼が社會民主主義を奉ずる所以亦自ら明かである。(十二、八、十一)